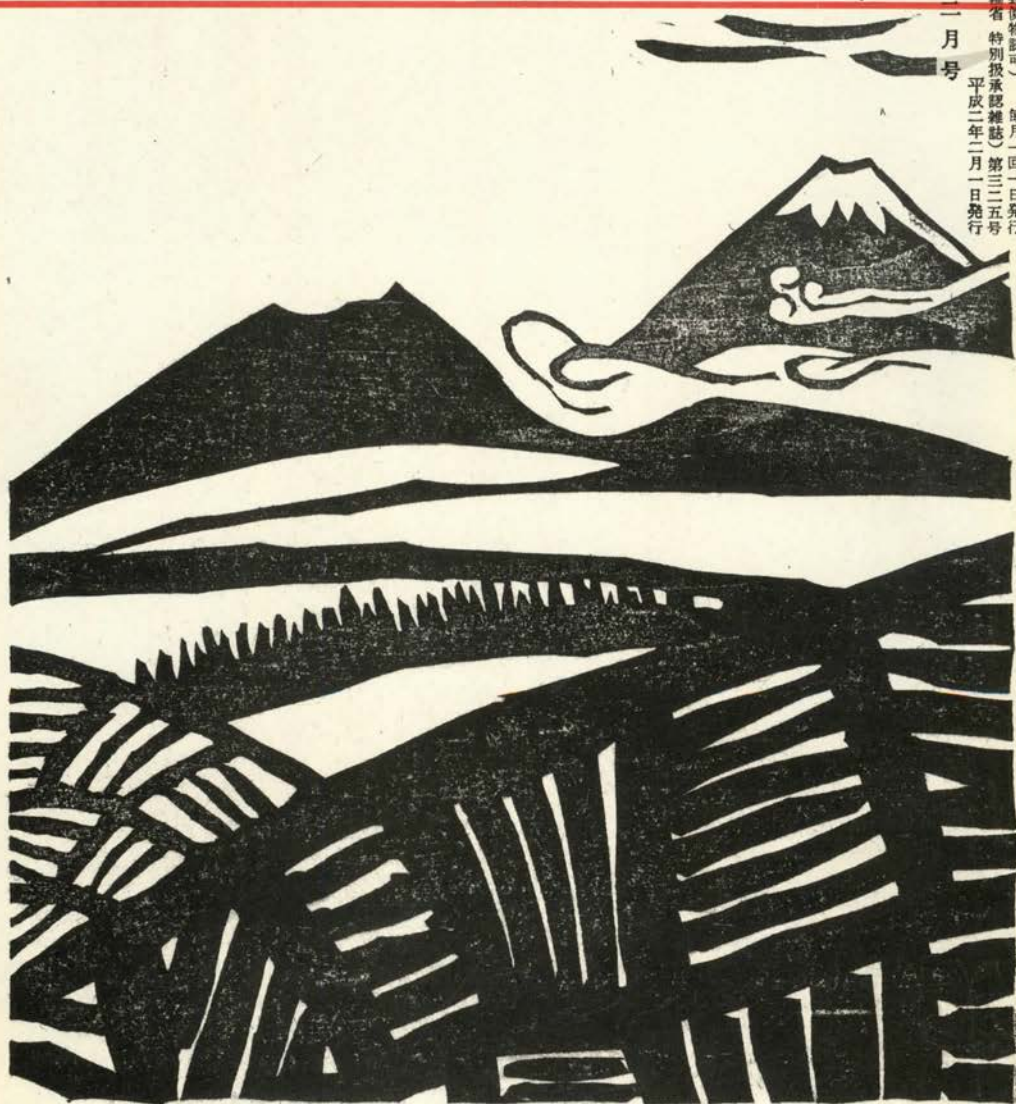


浄土

1990 2

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省特別授承認雜誌）第三五号
平成二年一月二十五日印刷
第五十六卷 二月号
平成二年二月一日発行



二月の秀句

立春のぶつかり会ひて水急ぐ
疊目の大きく見えて春立つ日
坐る余地まだ涅槃図の中にあり

会田 保
八田 和子
平畑 静塔



|| 二 月 号 ||



一念弥陀を念ぜんに、なんぞ往生
を遂げざらん。

——『念仏大意』

目 次

——涅槃会法話——

ねはん会に思う……………稗 貫 公 夫……(2)

「涅槃図」が教示するもの……………東海林 良 雲……(9)

◇特別寄稿◇

須弥山世界の矛盾(上)……………後 藤 真 康……(17)
——科学と宗教のはざまで——

《四行詩二題》

私の涅槃会・春、浅くして……………清 川 宗 治……(26)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <35>

海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(28)
——我が思い出に住む犬たち(21)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(14)……………松 浦 行 真……(35)
——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

ねはん会に思う



稗ひえ貫ぬき公こう夫ふう

(平塚市法然寺住職)

「涅槃會」二月十五日、釈尊(釈迦)の入滅

の忌日(命日)に行われる法會、涅槃圖(釈尊の入滅の状況を写した絵画)を掲げるなどして、釈尊の遺徳を偲ぶ、と浄土選書十四『浄土宗

常識用語集』に書かれている。

大聖釈尊八十年のご生涯において、三十五歳にして、菩提樹下で「さとり」をお聞きになったのは十二月八日の、明けの明星が輝く

時であった。それらしい、初転法輪サルナート（鹿野苑）で五人にご説法され、いらい靈鷲山でのご説法、さらにインド各地において法を説きあかさされ、最後はクシナガラにおいて二月十五日満月の冴えわたる夜半八十年のご生涯を黄かに閉じ（入涅槃）られた。涅槃図とは釈尊最後のありさまを示されたもので、多くの生き物が嘆き悲しんだのであります。このご入滅の日に人々は、釈尊の尊いご生涯を仰ぎ仏徳を偲んで、本堂に涅槃図を奉って追恩の法要を営むのであります。

今から二千五百年前に釈尊がご入滅されて以来、今日、涅槃会を迎えて、私は人生にあつて、生きることの意味を痛感するのです。もう三十年も前のことになります、私は新橋駅前の場外馬券売り場の近くをうろついてい

たのです、それはお金も無く行くところもなく、乞食どうように、当たり券が落ちてないか必死で捜していたのです。両親の離婚に会い、家は崩壊して家出をしたのだから行くところもなく、しかたなく、ぶらぶらしていた時の事です。まもなく新橋駅烏森口前にある、レストランに下働きとして雇ってもらい、全身ビショ濡れになって、サラ洗いをし、汗だらけになって、くたくたになるまで働いていました。何とか生きねばならないと夢中になっていました。

私は、たまに芝の増上寺に所用で行ったり、電車で東京にでかけたおり、車窓から東京タワーを見る度に、今でも何か胸にこみあげてくるものがあります。

朝早く牛乳配達や新聞配達がごみ屑で散ら

かった、新橋駅前の繁華街を自転車に乗って配達するころ、ねむい目をこすりながら起きてきて、大きな鍋に米を入れて身体全体を動かして、米を研ぐしぐさが今でも懐かしく思い出されます。仕事が終わるのが早番の時は夕方の七時で一日の仕事を終えて、洗濯物を屋根上の物干し台に干す時、何時も東京タワーの明かりが点滅して夜空に美しく輝いていました。東京タワーが出来てまだもない頃で、有楽町にあった数寄屋橋のどぶ川も埋められて新しくショッピング街になり、上を高速道路が出来た頃です。仕事が終わると仲間と連れ立って、工事中の高速道路を歩いて数寄屋橋まで行き、橋の上から不二家の奇麗なネオンを眺めながら将来の事について、仲間と話し合ったのは昨日のように思われる。歳

月は瞬く間に過ぎ去ると云うが、まことに日が立つのは早い。あの時は金だ、この世の中を生きるのには金を持たなければ駄目だと、若い私は真剣に思ったものである。両親の離婚、家庭の崩壊、すべて金のためだった。私は貧乏はいやだった。夢中になって金儲けのために事業家を志した。それから数年過ぎて、なんとか事業を初めて生活が出来るようになった。結婚もし、子供も生まれて人並に家庭生活をするようになってくると、子供のため、家庭のためと、何かにつけて考えるようになった。私は自分の生き様に疑問を持つようになった。誰が考えてみても人生は二度とない、この二度とない人生を現在の私の生き様でよいのか。この様な疑問が心に生じて来たのである。こうして、この疑問が私の心からつい

に消えることがなく、何時も大きく渦を巻いて私の心に覆い被さるのです。人として生まれ、本当に生きるのはどうすれば良いのか、本当の生き方とは何か、私の狭い交友関係において誰もそれを教えてくれるものもなく、唯、笑われるのが常であつた。苦惱は瞬く間に十数年の歳月が過ぎた。ある昼下がりの二時頃である。湯船の中にお湯を一杯にして私は、身体全身首まですっぽりとつかつていた身体をよく温めてから、さあ、髪を剃つてくれと、言つて、妻に髪を剃ってもらつていた時のことである。私は身も心もすべて仏陀釈尊に捧げると思ふと何か晴々とした気持ちになつていた。すると私の頭の上の方で髪を剃りながら鼻をすする音がする。どうしたのかと、尋ねても返事がない。暫くすると、涙が

ポトリと私の肩に落ちて、それが胸のほうにまで、伝わつてきた。何か、わたしから離れて遠いところへ行つてしまふような思ひにかられて、あの時は悲しくて何ともいたたまれない氣持になつたと、後で妻は話してくれた。これは私の出家得度の時である。それから十数年立つた今では、二人の子供も出家して僧侶になつてゐるが、その都度、髪を剃つたのは妻である。

法華經はあまりにも有名なお經であるが、その法華經の特徴の一つは比喻を多用している点にある。その中で「長者窮子の喩」は第四章(信解品)に説かれてゐる比喻である。そこには一人息子が幼いときに家出をして放浪するうちに、乞食(窮子)に落ちぶれます。わが子の行方を探しに出たその父親は、旅先で

商売に成功して豪商（長者）になります。ある日、疲れ果ててみすばらしい姿をした窮子は長者の邸の前にさしかかりますが、長者が自分の父であることは、もとより知りません。

しかし長者は、彼がわが子であることを知り、招きよせますが、窮子は恐れて逃げ出します。

長者は、家人に彼を捕らえさせ、雇い人として、働かせしだいに重用して、最後にわが実子であることを明かして家財を譲るといふ話である。この比喩を読む度に私は釈尊の素晴らしさに心を打たれるのです。私はこの世に生を受け以来、様々な苦悩の経過をへて仏門に入った。

人間には、誰にも仏性（仏の子）があると云う。しかし、それに気づかず、煩惱の赴くまま自らを苦悩に身を投げ入れて、さらに迷

いを重ねて苦悩の果てに、この世を去って行くのが、大方の人々である。窮子長者に会うごとく、今生において仏道に逢い、しかも念仏門に入ることを得たことはまことに不思議である。また別な言い方をすれば仏縁が熟していたのかもしれない。一度は恐れて逃げ出した窮子のように、煩惱に惑わされ、何度となく迷山に片足を踏み込みながら、なんとか仏門にしがみついているこの私である。誰しも、自己を凝視したとき、あまりにも罪深い自己に気づくのである。こんな私が釈尊の弟子といえるのか、と反省もし、恥ずかしさが全身を駆けめぐる。まるで釈尊の教えを素直に随順でき得ない愚かさ、沙門であることが、恥ずかしいかぎりである。こんな私にうってつけなのが、法然上人の念仏である。私

がこの浄土教に辿り着いたのもまた不思議なのである。元来、私の家は、天台宗の家として五百年続いている家であるが、気づいてみると法然上人の浄土教を求めている。

法然上人は、

「おほよそ、仏教おほしといへども、所詮、戒定慧の三学をばすぎず。所謂小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、顕教の戒定慧、密教の戒定慧、他。しかるに、わがこの身は、戒行において、一戒をも、たもたず、禅定において、一戒をも得ず。人師釈して、尸羅清浄ならざれば、三昧現前せずといえり。又凡夫の心は物にしたがいて、うつりやすし。たとえば猿狡の枝に、つたふがごとし。まことに散乱して動じやすく、一心

しずまりがたし。無漏の正智なによりてか、おこらんや。若し無漏の智剣なくば、いかでか悪業煩惱のきずなをたたんや。悪業煩惱のきずなをたたずんばなんぞ生死繫縛の身、解脱することをえんや。かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせん、ここに我らのごときは、すでに戒定慧の三学の器にあらず」

〔和語灯録〕五

尸羅清浄ならざれば三昧現前せず、とは戒定慧が清らかにたもたれていないと三昧すなわち精神の統一はできないと云う。たとえば猿が枝から枝へ移り動くように、まことに心は乱れ動いて、おちつきにくいものである。そのような心をもっていてどうして煩惱によ

つて汚されない、本当の智慧がどこからおこつてこようか。もし煩惱に汚されぬ智慧の剣がなかったら、どうして悪い行いやいろいろの煩惱の強い絆を断ち切ることができようか。

悪い行いや煩惱の絆を断ち切らなかったら、どうして、迷いや煩惱にとりつかれているこの身を解放することができようか。ああ悲しいことである。どうしたらよいのか。この戒定慧の三学のほかに、われわれのような弱い人間にできる修行や教えがあるだろうか。

法然上人は人間の愚かさの前にはなにも出来得ない自己をみつめられたのです。そして二十五年間の苦修練行の末、ついに四十三歳の春、一一七五年（承安五年）、

「乱想の凡夫、称名の行によって往生す

べきの道理を得たり」

と自らの救いを得、また広く万民に救済をもたらしただけです。

有余涅槃、無余涅槃云々と涅槃の説明は他者にゆずるが、釈尊は三十五歳で悟りをお開きになり、八十歳のご生涯を終るまで、沙門として道を求め続け、完全なる涅槃に入られたのが二月十五日（涅槃会）である。その釈尊の真の教えを法然上人は、私ども愚鈍の者（人間）に広めたのである。それは老若男女貴賤を問わず、有智無智を論ぜず、万民平等救済の教えである。唯、念仏を称えればよいのである。毎年涅槃会を迎えると、私は偉大なる釈尊と、法然上人に報恩謝徳のまことを捧げお別時をするのである。

「涅槃図」が教示するもの



東海林良雲

(塩釜市雲上寺住職)

毎年、二月十五日になると、私の寺では寺宝の「涅槃図」を本堂に掛け涅槃会を厳修するのが恒例になっている。この「涅槃図」は仙台藩四大画人の一人である小池曲江が菩提

寺の雲上寺に奉納したもので、款記に文政壬午春二月奉納小池曲江平維則写図とあり関防印に「三経天覧」印が捺してあり中央には、釈尊の涅槃、上部に天上から菩薩の来迎、下

の方に百獸が泣きふしている図であり一般的な「涅槃図」の構図ではあるが、その繊細な描写は彩色も豊富であり、まさに南頻派の傑作といえる。

全国的にこの日は、涅槃会が各寺院で厳修されるが、この素晴らしい「涅槃図」を拝ましていただくことはありがたく、時の流れを越えて郷土が生んだ天才画人曲江をしのび、そして釈尊の涅槃の姿を通して生も死も超越した不動の心境——涅槃——に檀信徒共々ふれさせていただいている。

この「涅槃図」は70×150cmのあまり大きなものではないが、拝観すればするほど味わいがあり、画人曲江が心をこめて奉納する菩提寺のために描き残したような気がしてならないのである。

画の中央に釈尊が横たわり、師の最期に多勢かけつけている弟子の中でも特に目を引くのは、釈尊十大弟子の一人阿難尊者である。釈尊の足もとで永い伝道生活で疲れた尊いみ足を悲しみをこらえながらいたわりさすっている様子がよく描かれている。

釈尊の涅槃まで二十数年間待者として仕え、釈尊と一諸にインド各地を遊行して釈尊の教えを一番記憶し多聞第一といわれただけに、どんなにつらい心境であつたろう。

釈尊が入涅槃されたのは、午前四時頃だといわれている。その日は、阿難尊者とやはり十大弟子の一人で釈尊の従弟にあたり天眼第一の阿那律尊者がまだ煩惱を断じえず、泣き悲しむばかりの弟子達に法話を説いて過ごしたといわれている。

「涅槃図」にも煩惱を断じ、正しい思惟と自覚をもつて悲しみを必死に堪えている弟子達の様子と、まだ煩惱を断じえず両腕をのばしたり、かがみこんだり全身で泣いているもの、砕かれた岩のように打ち倒れ、あちこちにのたうちまわっているものなど、多くの弟子達の悲しみの様子が様々に描かれている。

そしてそこには大型の動物や小動物、小さな虫までも描かれ想像上の動物である龍や文政当時にはみることの出来ない象や獅子など多くの動物が静かに悲しんでいる様子が見事に表現されている。動物だけでなく、あらゆる生きとし生けるものが悲しんだといわれ、涅槃のバックになっている沙羅双樹の木も八本描かれているが、その沙羅の木々が時ならぬ白い花を咲かせている。私の寺の庭にも沙

羅双樹があるが、どうもインドでみる沙羅双樹とは種類が違うようである。ただ夏になり可憐な白い花を朝に開花させたと思っていると、いつの間にか、夕方までに次々と花を散らしてしまうので、その散り方から、釈尊の入涅槃でも白い花が絨毯のように散ったといわれるところから、夏椿といわれるこの木の沙羅双樹の別名ができたのであろう。

ただ何げなくこの深い悲しみが漂う「涅槃図」を拝観すると、何か異様な光景のようだが、じっくりと拝観していくと、涅槃というと死ぬことだけだと考えがちになるが決してそうでないことが明確に教示されてくる。

「涅槃図」に示されている釈尊の姿は、まぎれもなく一人の人間の姿である。釈尊で、最期が近づくにつれ疲れから、しばしば横にな

り肉体の苦痛を訴えている。しかし釈尊は決して自分の最期をなげいたり恐れたりしていない。むしろまわりの弟子達が、あわてふためき歎くのをみて、これを慰めたしなめるというまことに静かな心境であった。

「頭北面西右脇」に横たわったその姿から、真魂を体得し、不死の道を説いた人にふさわしい涅槃の様子がしっかり描かれている。

「涅槃で待っている」と書き残して自らのいのちを絶った若い映画俳優がジャーナリズムを賑わしたことがあった。最近では若者が涅槃寂靜などと自動車に書いたりファッションの様に涅槃という言葉を簡単に使っているが、恐らくマスコミが大々的に取りあげなければ、単に読むことすらむずかしい涅槃という言葉をこれほど使うことはなかったろうと

思われる。ただ単に現代の歓楽を味わい尽した青年は、涅槃寂靜をかて安らぎの世界と理解しているようである。

勿論静かで安らぎの世界であることは確かだが、死を超えた涅槃の真の意義をみていくことが大切である。沙羅双樹にしても、八本描かれているが四本は青々と緑の姿を表わし、もう四本は白茶に描かれている、四本の青々とした緑の木は、仏教の教えの真理は不変のものであり、四本の白茶になった沙羅は、人間である限り死滅したので枯れてしまったのである。

釈尊は、自分亡きあとの教団について心配する阿難尊者に「私はすでに八十歳になった。たとえば古い車が修理してやっと動いているようなものだ。阿難よそういうものをあてに

してはならない。汝は現在も私の死後も汝自身をよりどころとし真理をよりどころとすべきである。決して他のものをよりどころとしてはならない」と厳しくいましめている。偉大な指導者である人が死んだらどうなるだろうと心配する弟子達に、釈尊は、そのような心配はいらない、教団の礎は真理そのものであり、私ではない、さとりを求めるものは自分自身で真理を体得する道を歩む他に方法はない、といっているのである。

仏教の真理を具体的に示すものとして一番最初のものに諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法印がある。簡単にいうと、あらゆるものは無常で生滅し変化する。すべてのものは実体とか本体とかいわれる永遠不滅のものはない。そこを超えた所に安らかな理想の世界

があるということになる。仏教は、無常とか無我とかを強調しすぎ、そのため厭世的になりすぎるともいわれるが、これは一方的な見方ではないだろうか。実は仏教の理想とするのは涅槃寂靜にあることを知ることが大切であろう。悩み苦しみのない安穩の境地にいたることを目的とするために現実世界をよく正しく見るのが大切である。現実の苦や不浄や愚かさ、平凡などをよく見ると理想世界を求める強固な宗教心が起きてくる。

釈尊の死が真近かになってきて阿難尊者は葬式はどうすべきかと釈尊にたずねるのである。釈尊は、「そうしたことにかかわってはならない。さとりを求める修行者は真理のために努力することだけ考えるがよい」と答えている。まさに然り、今の日本の仏教の姿は

どうしたことであろうか。仏教は生きているもののためにある教えであるということを再確認したいと思う。

仏教では、涅槃寂靜が大切であることは前にのべたが、それが単なる死でなく、そこに光り輝くものであることが大切である。

現代社会は、身のまわりをみても不安にかりたてられる材料ばかりである。情報はあふれ伝達の方法は多様化し、交通手段はいっその速さを求め、売手と対話せずとも自動販売機によってほしいものが手に入る。自然のままにしておけば忽ちに腐ってしまうものも永い間保存できる。野菜や果実、魚類にしても旬という言葉はもはや死語になりかけている。日進月歩などというものではない。分進秒進ともいべきメカニズムの世界、このよ

うな進歩は確かに生活を便利にしてくれる。しかし、心の世界は豊かになっただろうか。「涅槃図」を拝観しながら反省したい。

釈尊が身をもって教えておられる涅槃から、釈尊の体がほろびても釈尊の残された自然の運行に必要な原理・真理のもとに生活する方法、つまり、仏道は永遠の輝きをもって人類を導くものだということを知ることができる。

諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜の心をはつきりと自覚し正しい人間の生き方、幸せな生活の導きを自覚・認識し、平等一切にこの世の人々すべてが救われ、共にありがたいと暮らせる世界をつくりたいものである。

この願いが、浄土宗宗祖法然上人、立教開宗の心であり、愚直・徹に阿弥陀仏のご本願にすがり、念仏を申していくことが出来るな

ら、やがて阿弥陀仏のご本願に救われていくことができる。

「生けらば念仏の功つもあり、死なば浄土にまいりなん。とてもかくてもこの身には思いわずらうことぞなきと思ひぬれば、死生ともにわずらいなし」とは法然上人のお言葉だが、

元気で生かされている今、この時に念仏相統をしっかりとしていく中にこそ、涅槃寂靜という仏教の理想の姿がえられるのではないかと思う。一枚の「涅槃図」から、今大切なものは何かをしっかりととらえていきたいものである。

『江戸物語』

細田 隆 善八豊明▽著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

● 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録

● 定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

△発行・発売▽

ノ ン ブ ル 社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
電話(〇三)二六九―二九三 二六七―六六三七
振替(東京)七―一一〇九三/ト二六二

＜日本図書館協会選定図書＞

◎“維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしまいにしました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもつて、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

《特別寄稿》

須弥山世界の矛盾 (上)

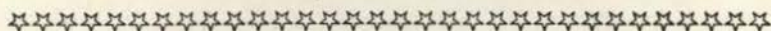
— 科学と宗教のはざまで —



後藤真康

(東京・江東区円通寺住職
農博)

先に存続上人作「世界大相図三幅対」を中心に、須弥山世界観の紹介をさせていた。たところ、大正大学の石上善応先生始め思わぬ方々からお手紙を戴き、感激すると共に自分の不勉強を恥じている次第である。そのなかで、かつて円通上人や佐田介石師のお仕事の勉強をされた方が少なくないのを知った。それで思い出したのだが、元薬師寺管長の橘



本凝胤上人は今でも天動説を信じている人として有名になったことがある。昭和二十五、六年頃、随筆家？の徳川夢声師は各界の有名人と対談し、その記録を「問答有用」と題して「週刊朝日」に連載し評判が高かった。これはその後単行本として出版されている。たまたま当時薬師寺の管長であられた橋本凝胤上人と対談された時、突然、上人が「私はいまでも天動説を信じている。」と言い出された。夢声師はびっくりし、憤然として、「それは不合理だ」と反発したので大論争になったという。ところがその記録を読みかえしてみると、実は全然論争になっていない。凝胤上人は「あなたは学校の先生などから地動説が正しいと教えられたからそれを信じているだけだろう。私は自分で仏教の暦法などを研究し、それが正しいと信じている。それで今まで不都合を感じたことはない。天動説が間違っているというのなら、その根拠を示しなさい」とせまる。これに対して夢声師は、「天動説は非科学的である」と繰り返すだけで具体的な根拠を一つも挙げるができなかった。これでは夢声師の負けである。

凝胤上人がこんなことをいいたされた真意はわからないが、上人のご指摘は大変大切なことだと思うのである。私もさきに、円通上人や佐田介石師のお仕事を非科学的だのナンセンスだなどと決め付けた。何故そう考えるかの根拠を示さないことには凝胤上人のお叱りを受けることになる。そこで、ここで私は学校で習った物理の知識等はあるべく忘

れ、円通上人と同じ時代の人となったつもりで、須弥山世界観にケチをつけてみようと思うのである。馬鹿ばかしいこととお考えかも知れないが、これには理由がある。

実は、私は日ごろ現在には科学的な知識があまりにも安易に普及するようになったために、多くの人々はかえって非科学的になってしまったのではないかと思っている。昔はわからないことがあると自分で情報を集め、自分の頭で考えて判断するはかばかかった。この頃はなにごととも他人まかせで、テレビや新聞のいうことを簡単に信じてしまう。宗教も同じで、自分自身で真剣に人生に悩む前に、やたらに色々な宗教がご利益を振りかざしてせまってくるので、安易にそれにたよってしまう。その結果、超能力などの迷信や邪教がもてはやされるのではないだろうか。もう少し自分の頭でものを考えてみる必要がある。そこでこの機会に須弥山世界観を一つの題材として、自分の頭でものを考える訓練を試みることも無駄ではあるまい。また、そうすることで、科学と宗教との違いも明らかにしてみようと思うのである。

天球と地平線

須弥山世界観に対するもっとも単純な批判は、「望遠鏡で北の空をいくら眺めても須弥山は見えないじゃないか」というものであろう。しかしこれは、「須弥山はあまりにも遠



くに存在し、途中に別の高い峰もあるから見えないのだ」という反論が成り立つ。我々のうち大部分の人はチョモランマ（エベレスト）を実際に見たことはないが、それが存在することを信ずるのに矛盾を感じてはいない。まして、円通上人の時代には北極や南極に達した人はいなかったのである。単に自分の目で見えないというだけでは否定の根拠としては不十分であらう。

須弥山世界について私が感じた最初の疑問は、「天球や地平線が存在し得ない」ことである。天動説をとるか地球が回転しているところかは別としても、我々の見るところでは、太陽は必ず地平線から昇り、天球を移動して地平線の下へ沈んでゆく。天球や地平線は我々にとってなじみの深いものである。私達が夜、空を仰ぐとき空は球を半分に切ったようなものだな、と感じる。星はその半球の内側にちりばめられた宝石のようにも見える。何回も注意深く星を観察した人は、星はばらばらに散っているのではなく、常に決まった形で並び、そのままの形で東から西へ動いていくことに気が付くであらう。ここから人は星座を考え出した。ヨーロッパや中国では星座は古くから研究され、神話の題材や占いの材料とされてきたことは周知のとおりである。ところが、仏教の宇宙観や説話には星座に関する話題が乏しいように思える。宿曜経などに説かれている星座は中国のものが取り入れられたものと言われている。これも須弥山世界観の特徴といえるだろう。

天球は星座の動く背景とも思えるし、星座のはりついた天球自体が回転しているとみることでもできる。太陽と月は天球の上を星座の動きとは別な動き方で移動している。したがって、太陽や月の軌道を星座を尺度として決めることができるのである。中国では天球が半球なのか完全な球なのかで説がわかれ、完全な球とする説（渾天説）が優勢を占めたという。天球と地面が交わる線が地平線である。

地平線には別の見方もある。海岸へ行ってみよう。海ははてしなく広がるが、どんなに晴れた日でも、どんな目のいい人でも、海の見通せる距離は限られており、遠くで海と空が接しているところがある。これが地平線である。地平線は左右が下へと緩やかに曲がっており、地面は円いんだなと感じられる。そして遠くの舟が地平線の下から、マストを先頭にせりあがってくるのを見れば、地面は遠くへ行く程たれ下がっているのだな、と想像できる。この左右と前後の曲線をそのまま延長すれば、自然と地球が球（あるいは球の一部）であるとして理解される。海岸ではなく、広々とした平野の真ん中でも同様であろう。したがって海洋民族のギリシャ人や平野に住む中国人にとっては「地球説」は抵抗なく受け入れられる宇宙観であつたろうと思う。ただ、地球の裏側に逆立ちした人間が住んでいるとは想像しにくいから、地面を半球あるいは球の一部と考えることが多かったようである。いずれにせよ太陽や月は地平線から昇り、地平線に沈んでゆくのである。

さてそこで須弥山世界を見てみよう。そこには地平線がない。天球がない。太陽と月は須弥山の中腹を地面とほぼ平行な軌道を通って回転しているのである。星は太陽や月と同様に須弥山の中腹を巡っている小さな宝石の粒とでも思われていたようである。太陽も月も星も、水平な四大海と四大洲にはほぼ平行した円の上を動いている。いわば天球ではなく「天面」であり、地球説でなく地平説である。地面と天面は平行しているから接触しない。従って地平線は存在し得ない。そうなると太陽や月はどこから昇り、どこへ沈むのだろうか。須弥山世界観によれば、太陽は須弥山をまわっており、太陽が須弥山の南側にあるとき我々の住む閻浮提は昼となる。太陽が須弥山の向こう側へいった時こちらは夜になるという。したがって太陽は地平線からでて地平線に沈むのではなく、遠くの山から現れて遠くの山に水平に隠れていくとしかいいようがない。存統上人の「世界大相図」では、われわれの住んでいる閻浮提は須弥山の最下部の側面にへばりついているように見えるので、これなら少なくとも東西には地平線があり、太陽はそこへ沈んでゆくように見える。しかしこれは図からみた錯覚で、本当は閻浮提は須弥山とは直角な平面にあるというのである。

閻浮提が平面だとするともう一つへんなことがある。地面が水平なら地上はどこまでも見通せる筈である。普通はなにか目をさえぎるものがあるから、そんなに遠くは見通せないが、海なら障害がないから、増上寺の山門の上からハワイくらいは見えても不思議はな

い筈である。しかし実際はどんなに目をこらしてもアメリカ行きの船は地平線の下にたちまち隠れてしまうのである。

季節による太陽の高さと日中の時間

須弥山世界観にはもう一つ問題がある。太陽が地面に平行した軌道をとるとすると、季節による日の出、日の入りの時間や太陽の高度の変化を説明するのが大変難しいのである。須弥山世界観でも、太陽の軌道は日によって異なり一年の周期が存在することになっている。ところがその説明には矛盾がある。まず、冬はみかけ上太陽の位置が低くなるがこれは何故だろうか。須弥山世界観では、冬の太陽は中心が須弥山の南にありもつとも南に下がるような軌道をとるといふ。そうすれば南中(真昼)時の太陽の高度は低くなり、実際の観測と合っている。しかしそうになると、冬の太陽は須弥山の南に長く止どまることになり、冬の方が昼間の時間が長くなることになってしまう。夏はこの逆である。冬の方が日中の太陽の軌道が長く、それでも日中の時間が短いとすれば、冬の方が太陽の速度が速いと考えざるを得ないのだが、実際は太陽の移動速度は一定である。日中時間と高度のつじつまを合わせる為に楕円型の軌道が夏と冬で九十度回転するとも考えてみたのだが、太陽の移動速度が同じだとするとこれでも説明がつかない。

もう一つの説明方法は、太陽の軌道の高さが冬は実際に低くなり夏は高くなるとすることである。そして須弥山は下部ほど太くなっているとすれば、太陽の見掛けの高さと日中時間の長短については矛盾なく説明することができる。ところが今度は冬は夏より太陽が地面に接近するのに、暑くならず逆に寒くなるという矛盾が生ずる。結局、太陽が地面とほぼ平行した軌道をとることに無理があるのである。

須弥山世界と現実

須弥山世界観をそのまま現実のものだと考えるとたちまちこうした矛盾につきあたってしまう。何故こういう世界的にも珍しい宇宙観が生まれたのだろう。実は須弥山世界観は仏教以前にヒンズー教徒が考えた宇宙観で、それが若干変化して仏教に取り入れられたものである。そこで考えたのだが、須弥山世界観を作り出した人達は山や森林に取り囲まれて、地平線を目にする機会が少なかったのではないだろうか。須弥山のモデルはヒマラヤ山脈であるとはすぐに想像できることである。ヒマラヤ山麓では空は山にさえぎられて、ビルの谷間にいる我々と同じように狭いものだったのではなからうか。さらにこの人達は、狭い視野に加えて、高い湿度や長期の雨にさまたがられ、一年を通じて月や星座の動きを観察するのが困難だったのであろう。そしてインドでは太陽の高度差や日中時

間と季節とのつながりはそれほど強くはない。むしろ、雨期、乾期の区別が重要である。こう考えると須弥山世界観は当時の人達にとってそう不自然なものではなかったのであろうと思われる。

ただ、インドでも海岸地方の人達は中近東や中国と交易していた海洋民族である。また、高原で農業や牧畜を営んでいた人もいるであろう。こうした人達によって世界観の修正がなされてもよかったのではないかと思う。それがなかったのは、世界観を思索するところが一部のバラモン階級に独占され民衆の手から離れてしまったからであろう。そして仏教においては生命観（無常観）や生活規範のほうが重視されて、世界観の内容はそれほど問題にされなかったのだと思われる。実際、長阿含経等には「このように世界は無常である」との記載が随所に認められる。そして、哲学としての宇宙観はより高度に深められた華嚴世界観等に発展する。さらに仏教は中国に伝えられるが、そこには既に独自の宇宙観があり、科学としての宇宙観はそれで十分であったであろう。日本でも事情は同じである。新井白石が「世界は鶏卵のような形をしている」と書いたのも、西欧の知識よりも先に中国の渾天説を知っていたからではなからうか。まして日本では大乘仏教が中心となるから、小乗の宇宙観である須弥山説はあまり深く吟味されなかったのであろう。

（つづく）

四

行

詩

二

題

私の涅槃会

清^{きよ}
川^{かわ}
宗^{そう}
治^じ

(詩人)

森羅万象の悲しみの涙も
さとのりの世界にやすらぐ
南無寝釈迦牟尼仏
私も 今宵はやすらごう



春、浅くして

早春の薄い光
雲映す水 雪解けの香り
遊ぶ子の笑いこぼれて
小川に流れる

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

(詩

人



木

下

隆

一

随

筆

集

35

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(21)—

木の^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

いまにして思えば、東京で過ごした二十日余りというのは、私の人生でも最も退屈な無意味な時間であった。受験が済めば発表を待つだけで、後は何もすることがなかった。さつさと帰ればよかったのに、「発表を見て帰れ」と父が言うので、強いてそれを振り切つて帰ることもならず、そうこうしているうちに引いた風邪をこじらせて寝込んでしまった

のである。父の起居していた会社の独身寮は、元々個人の持ち家だった物を買い取って別棟を継ぎ足した造りだったから個室がある訳ではなく、単身赴任の父は別格で座敷に相当する八畳間を使用していたが、襖一枚隔てた次の間では夜な夜な遅くまで麻雀の卓が囲まれ、とても受験生が止宿する雰囲気のところではなかった。管理人の老夫婦が何かと世話を焼いてくれるのは有難かったが、反面それが煩わしくもあって、風邪で寝込んだ時も、無理をして二日で起きた。私の祖父母に近い年配の人に、あまり迷惑をかけたくなかったからである。殆ど毎日一日中部屋に籠って、私は床の間に積み上げられていた雑誌の類を読んでいた。それまでも決して活字に飢えていた訳ではなかったが、持て余した暇を潰すにはこれ以外手立てがなかったのである。

井上靖という作家の誕生を知ったのはこの時であった。「文芸春秋」三月号に、昭和二十四年度後期の芥川賞の選考結果や選者の言葉、受賞者の略歴などと共に、受賞作品の「闘牛」と「猟銃」という小説が併載されていた。全く傾向の異なる二つの作品は一種の恋愛小説には違いなかったが、どちらも読み甲斐があつて飽きさせず、多才な作者の一端をのぞかせていた。が、それよりも私の目を引いたのは受賞者の略歴であつた。当時、一部の小説家の奇矯な振る舞いが雑誌のゴシップ欄を賑わしていたので、私もかなりそれに毒されて私なりの小説家像というものを作り上げていたから、井上氏が現役の新聞記者で

あることや四十二歳という高齢のデビューであったこと等々、既成の小説家の範疇からはみ出した人、つまり極めて常識的な平凡な人のような気がしたのである。しかしこの時、私は漠然とはあるが井上文学との運命的な出会いのようなものを感じた。私が大学卒業後放送会社の制作局に進んだのは「闘牛」の影響であり、伊豆に居を構えたことに「猟銃」が影を落しているのは否めない。その後の氏の作家活動については私が記すまでもないが、井上文学と私をより強固に結びつけたのは、受賞後初めて発表された「漆胡樽」という、昭和二十一年秋開かれた第一回正倉院御物展を題材にした小説であった。

この小説との出会いは偶然であった。後に三原に帰ってからのことであるが、有名大学の入試問題と模範解答を特集した受験雑誌「蛍雪時代」を買に行った時、それに並んで掲載誌の「新潮」四月号が置かれていたのである。「蛍雪時代」で確認したかったのは東大の国語だけで、あとの学科は放擲したも同然だったから見るまでもなかった。東大の国語は私には易しかったが、批評では難問とされているのは意外だった。解答は記述式だったから、ニュアンスの違いで多少減点されたかなと思ったが、模範解答で見る限り、私は満点の答を出していた。それだけ見れば十分だった。「蛍雪時代」を置くと、何のためらいもなく私の手は「新潮」に伸びた。そこに井上氏の小説が載っていることも知らず、いままですの存在すら念頭になかった雑誌にである。この時の心理状態は不可解で、私には

説明出来ない。見えざる神の手の導きとでも言うのであろうか。パラパラと拾い読みして、いつまでも過去に拘っていても仕方ないじゃないか。それよりも「日本帝室の掌の上に落ちた隕石」、古代西域の生活器具であったと推定される漆胡樽を通してロマンに浸る方が余程夢があつていいじゃないか——そう思うと、私はあっさり「蜚雪時代」を捨て、「新潮」を求めた。そして忽ち「漆胡樽」の世界にのめり込んでしまったのであった。いくら覚悟の上の浪人であつたといつても、総体的に気分は暗かった。そんな私を「漆胡樽」はどれほど慰めてくれたことか。感銘を受けた書物は数多くあるが、その中で強い一冊挙げると言われたら、私は躊躇なく「漆胡樽」を挙げる。

閑話休題^{それはさて置き}。

東京にいる間に、私は二度しか母に便りをしなかった。それも一通は葉書で、書いているうちに虎徹にあてたものになってしまった。まさか木下虎徹殿とも書けないので母宛にしたが、さすがに気が咎めて、母には追伸の形で手紙を書いた。しかし一枚書くともう書くことがなくなり、

街歩く入試終りし気安さに

春風に重荷おろせし心地かな

天皇は右さず朝の御所うらら

などと駄句を書き連ねることで行数を稼ぎ、多少のフィクションを交えて近況を書いてみても、三枚の便箋を埋めるのがやっとだった。前の二句は実感には違いなかったが、多分に他人の目を意識したものであるのに反して、三句目は素直な実感であった。昭和天皇は全国巡幸の最後の地四国地方を廻っておられた時で、この句を作った頃は高知県内を御巡幸中であつた。

丁度この稿を書いている時、テレビのニュースは昭和天皇の一周年祭の模様を報じていた。一年前の氷雨降る朝、もたらされた崩御の悲報は、とりわけ我が家にはショックだった。というのも、前日下田の御用邸まで行つて、御平癒祈願の記帳をして来たばかりだったから、ショックは大きかった。あれからはや一年か——改めて時の流れの速さに驚くと同時に、同じ一年でも浪人時代の一年は、絶えず何かに追いかけているような焦燥感があったが、もう少し緩やかに時は流れていたように思ったことだった。

母への手紙は次の句で結んだ。

武蔵野の黒土踏むや朧月

それまで褐色の土の色しか知らなかった私にとって、黒い土は殊の外印象深かったのである。

予想通りの結果で総てが終わり、東京を離れた時は内心ほっとした。そして、ただ無性

に虎徹に会いたかった。会って、思い切り抱きしめてやりたかった。

発車の三時間も前からホームに並んだにも拘わらず、下りの「つくし」は私が乗り込んだ時は既に満席だった。しかし幸いなことに大荷物を座席に置いた老婆が、荷物を網棚に上げてくれるならという条件つきで、窓側の席を譲ってくれた。足許にスチーム暖房が通っているのでしめしめと思ったが、列車が動き出すと、そこは隙間風に晒される酷寒の場所、暖房は殆ど用をなさなかった。老婆は座席に荷物を置いて、虎視眈々衝立代わりになりそうな若い男を物色していたのであろう。身を刺す隙間風には参ったが、坐れたのは僥倖であった。上り列車ほどの込み様ではなかったが、私の後ろに並んで連中は立って行くしかなかったのだから。

トロトロ眠ってはしょっちゅう目を覚ましていたように思うが、途中の停車駅を殆ど覚えてないことから考えて、二十日余りを受け身で過ごしている間に、知らず知らずのうちにストレスが溜まり、疲労の極に達していたのであろう。全身をさいなむ寒気で目が覚めた米原は一面の銀世界で、霏々と雪が舞っていた。雪は足踏みしながらホームに立っている駅員のコートにも薄っすらと積もっており、手に提げた赤いカンテラが小刻みに揺れているのが、一層寒気を募らせた。なぜか足許の暖房は切れていた。

薄紙を剥ぐようは夜が明けて行き、自然光で通過する駅の名前が読めるようになった

頃、列車は琵琶湖に沿って次の停車駅大津に向かって走っていた。大津で降りるといふ老婆の荷物を、私はデッキの昇降口まで運んであげた。席を譲ってくれたことに對する、せめてものお礼だった。別れ際に老婆は言った。

「元氣出しいや、あんさん。何や影が薄うて危なかしくて見ちゃあおれん、ほんまに。それで隣に坐らしたんや。……氣いつけてや。ほんならさよなら」

言いたいことを言うだけ言つて、老婆は元氣な足取りで去つて行つた。

何だ、一晩中監視されていたのか、自殺でもしそうに見えたのかな。それにしてもそんなに影が薄く見えるのかな——洗面所の罅だらけの鏡に映した顔を見て、私は愕然とした。まさに幽鬼の顔であつた。病み上がりの上に、口の周りのまばらな無精髭、ボサボサに伸びた頭髮、張りのない濁つた目……、煤煙に汚れた顔は、どれをとつても成程影が薄かつた。

実は密かに、孤影悄然と敗残の身を駅頭に晒す時、どんな姿を演出すればよいかと考えていたのだが、何も演出する必要はなかつた。地のままでいけばよかつたのである。

(つづく)

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^ぐ の 生 涯 (十四)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

長崎・大音寺にて

大正十三年の一月、岩井智海は長崎の名刹・正覚山中道院大音寺の第二十二世住職を拝命した。

この大音寺は、長崎奉行をまだ代官といった時代、キリシタンのはびこるのを憂えた代

官長谷川藤正が慶長十九年（一六二四）に、関徹という念仏僧を応援して中道院という小堂を建立したのが始まりである。キリシタン禁制はその前年末に施行されたばかりで、まだ長崎のキリシタンはなかなか盛んだったのである。

しかし関徹の教化はなかなか見事で、その活躍が功をそうし、キリシタンから浄土宗に

転向する者が続出した。それを將軍秀忠が聞いて感心し、地所を寄進して一寺を建立したのが大音寺である。

その後、地所が町中であって狭く、火災にも危ういというので、関徹は折から島原の乱に出陣してきていた松平信綱を訪ね、現在の鍛冶屋町に引越す許可を貰った。ところが長崎奉行の馬場利重とウマが合わず、利重が邪魔をして工事がなかなかはかどらない。そこで関徹、信綱を動かして単独で將軍家光に拝謁し、朱印状を頂戴した勢いで移転を完了したというのだから、このお坊さん、政治力のほうも相当のものだったらしい。関徹は筑後の国安武城主・安武義久という者の第三子で、九歳のとき義久が龍造寺氏との戦いに敗れて没落し、それで出家したという人物である。

話が横道にそれたが、大音寺のちには檀

林となり、西国における宗学の府となったわけだが、岩井がこの由緒ある寺の住職となったのは、先代の二十一世宮澤説音が一宗の公選により百万遍の大本山知恩寺第六十七世法主に登壇したからであるが、その説音僧正自身、大音寺に住職したときは堂宇荒れ果て、それを再建するのに苦心した。百万遍に移るときまでにはおおむね中興したが、まだ仕残しがあり、それを智海に託したのだとも伝えられる。

事実、岩井は、前後八年にわたる大音寺住職の時代に、まだ手付かずになっていた汚損のはげしい庫裡約九〇坪（約二九八平方メートル）を鉄骨鉄筋コンクリート造りに新築しているし、暴風雨で痛んだ本堂も修理して、伽藍の整備につくしているのだ。

ところでこの庫裡再建は今も岩井を追憶する一つの語りぐさになっているのだが、長崎

でも当時は、まだ鉄骨コンクリートは珍しかった。それを寺院建築に使って、まったく新しい感覚でやろうと企画したのは、当の岩井自身だったのである。もちろんこれには、檀信徒のあいだに大きな抵抗があった。大音寺二十七世の現住職・本原邦堂はこう語る。

『理由は簡単です。「寺が鉄骨のコンクリート造りなんて……」ということなのです。それだけに、断固として着手するにはよほどの勇気と決意を要したろうと思いますね。岩井僧正の計画では、屋上に講堂を造る構想でした。しかしこれは結局、檀信徒の反対と予算不足のために、実現しませんでした。しかしこの、約二百畳敷きほどもある大広間は現在、柔剣道の道場として使われています。

頑丈そのものの鉄筋でしてね。建てて

すでに六十年近くを経た現在も、立派に機能しております。大音寺は原爆の爆心地から四キロほどしか離れていなかったのですけれどもね』（本原邦堂談話）

着手に踏み切ったのは昭和六年であった。少年時代の岩井が、大阪や東京でキリスト教系の学校に通い、西洋の伝道を学ぼうとしたことや、上野の音楽学校に通って仏教音楽の世界を作ろうとした進取の気性を、どこことなく思い起こさせる挿話ではある。

話題を元に戻そう。彼の大音寺住職就任をめぐっては、一方にまたこういう説もある。宮澤説音師が非常に檀徒の評判がよくて、その跡を継ぐほどの出家がなかなか見つからない。しかもその後継住職のポストをめぐつて争いのごときものも演じられ、決着がつか

ず、結局、寺方ではなく、檀徒総代などがリードして、どちらの派にも属さない岩井を招くことになった、というのである。当時、彼はすでに五重勸誠師として全国に東奔西走しており、その高名は隠れもなかった。大音寺の檀徒総代も、それで彼の名を知っていたということであらう。

さらに本原は、こうもつけ加えた。

佐世保の九品寺の創建者で本原の外祖父にあたり、岩井の三代あとに大音寺二十五世住職となった小田信巖の影響も、かなりあったのではないかというのである。

小田は浄土宗議会議長や総本山知恩院の執事長を歴任、といった宗政面ばかりではなく、青・壮年時代には九品寺のほかにも同じ佐世保で善光寺を、また中国の青島には善導寺を創建したのでもわかるように、布教にもずいぶん熱心だった人物である。三十代からしば

しば五重相伝を開催したが、明治三十九年にはその五重に岩井を勸誠師として迎えているのだ。本原の言うように、“水面下の交流”があったとしても、少しも不思議ではない。恐らくはこの三説ともが真実で、実はその複合が岩井の大音寺晋董しんどうを現実化した、というあたりが真相かもしれない。

岩井の住職時代とほぼ時期を同じくして、三宅春光が書生として大音寺に住み込んでいた。この物語にはすでに二、三度、登場ねがったので、ご記憶の読者も多いと思うが、前の浄土宗議会議長である。

彼は天草諸島の下島牛深・無量寺の弟子で、長崎の中学に通うために、大音寺に身を寄せていたのだった。

三宅の通学したのは東山学院とうざんがくいんで、この学校はのちに明治学院に合併されたのでもわかる

ように、キリスト教系の中学であった。

この中学生をつかまえて、岩井が三宅の旧姓に「和尚」をくっつけて、「松中和尚、松中和尚」と呼んだという挿話はすでに紹介したが、朝、味噌汁を作っているところへたまにたまあわせたりすると、この高名な布教師は「どれどれ」と味見をして、アドバイスをしたりするので、三宅はその頃は、

——ずいぶんと気さくな和尚さんだな。

という印象を持ったものだが、後年になって、気さくなだけではなく、細かいところにも気のつく、たいへんな苦勞人でもあったのだなと思うようになったと語っている。

気さくといえ、こんなこともあった。東山学院はキリスト教系の学校だから、試験でも宿題でも、よくバイブルから採った問題が出る。それで彼はねじり鉢巻でバイブルの勉強をしたものだが、あるとき彼の勉強ぶりを

岩井が覗きこんで、

「ほう、聖書の問題か。なんならわしが答えを書いてやろうか」

と言われたのにびっくりして、

「どうして聖書のことなど、ご存じなんですか」

「まだ松中和尚には話していなかったかな。わしもキリスト教系の学校を出たのだよ」

と、大阪の居留地にあった聖公会系の英和学舎から東京の聖パウロ学校（のちの立教大学）に進んだことを語ったのだった。

それでその後、この高名な布教師のお説教、やかかにと、本堂で聞き耳を立てていると、いきなり岩井が、

「押しも押されもせぬ、紳士淑女の皆さま……」

と切りだしたので、なんとハイカラなことを言われるものだなと、いささか戸惑ったが、

岩井がクリスチャン系の学校出身のことを思
い出して、なるほどこれはその影響かもしれ
ないかと、フに落ちたという。

しかしこれから見てもわかるように、岩井
は聴く人の立場、心理に立って、いろんな角
度からの効果を実験して措しなかった人であ
った。

もう一つ、三宅が驚いたことがある。とい
うよりも、これも戸惑ったといった方が正確
かもしれないのだが、彼はいつも盆の棚経に
なると、岩井のお伴をして維那役をつとめた
ところがあるとき、彼が差定通りにすすんで
『歎仏偈』にいたり、

「如来妙色身——」

と唱導しても導師がついてこず、その替わ
りに、

「弥陀身色如金山——」

と引き取って、フシつきの『三尊礼』をや

りだしたりしてしまった。これには維那たる
者、うろたえざるを得ない。

しかしこういう岩井独特の「法要」で大あ
わてをしたのは、三宅一人ではない。例えば
堺の旭蓮社の門中寺院なども、大困りしたく
ちだという。

例えば五重相伝の仕上げに相当する「密室
道場」へは、普通なら維那のたたく鑿（きん）にあわ
せた念仏で入場するのだが、それを『我建超
（四誓偈）』でやれ、しかもフシつきでやれと、
前の晩の予行練習で命じられて、維那が立ち
往生したものだ、梶原重道が回想している。
それはそうであつたらう。『四誓偈』は偈
（二種の詩）には違いないが、あくまでも無量
寿経のなかの一節である。经文につけるフシ
ど、かね太鼓で探してもあろうはずがない。
それをやれというのだから、維那が目面白
くさせていると、

「自分でつけるのです、自分で」

という。進退きわまった維那が、もちろん自己流でやりだすと、

「そうではない。こういうふう……」

と言って、音吐朗々とやりだす。梶原の記憶によると、その発声はごく自然で、きわめてゆつたりとした調べであり、まことに有り難く聞こえたそうである。

しかし譜面もないのに、今すぐその場でやれと言われても出来るものではない。「それらあ維那も、泣きますわな」と、梶原は冗談まじりにこの挿話をしめくくったものだったが、法要ばかりではなく、独自の岩井方式は、別の面でも発揮された。

例えば後年、浄土宗の管長（現在の門主）となつてからだだが、朝鮮から満州（現中国の北東部）へかけて巡錫（じゆんしゃく）したことがある。その日程や行事を策定したのは、知恩院内局の庶務部

長だった細井照道執事だったが、その細井が、「長らく管長に仕えたが、あんなわがままな管長は始めてじゃ。人に会うのでも好き勝手に訪問して会ったりして、ちっともルールに乗らんのじゃ」

と、高橋良和にぼやいていたそうである。

それで筆者が、法要にしてもそうだが、なぜ岩井はルールに乗らなかったのかと聞いたとき、高橋がこともなげに、

「それはやっぱり主義を持っていたからですよ。自分の尺度でもって『岩井の世界』を作りだすんだね。だからルールに乗らないにしても、乗らないだけの論理はちゃんとあったんですよ」

と答えたことを思い出す。

これでゆくと、棚経で歎仏偈（なげぶつぎ）のかわりに三尊礼を、また密室道場への入場をフシつきの『我建超（四誓偈）』でやったというのも、し

よせんは莊嚴さへの集中のためであつたに違いない。莊嚴さが生み出す信仰の増幅への期待、とても言おうか。もつとも棚経での三尊礼は、時間が許せばの話だが。

しかしこれらの一方、同じ岩井方式でもつぎのような面をみると、奇でも何でもなくなってくる。

例えば朝の勤行だが、その勤行がすんだあとの協壇(注)での、岩井の回向の長かつたことは有名である。なぜ長かつたかという、自分が結縁した人々すべてのその家先祖代々の回向を勤めるからである。それは大音寺であらうと、知恩院であらうと、少しも変わらなかつた。もつとも大音寺時代と知恩院時代では、結縁した人の数も飛躍的に増えているから、それだけ回向が長くなるのは自然の理で、これは止むを得ない。

三宅春光の後年、いちど知恩院での岩井の

回向に側近くで接する機会を得たが、聞くともなく聞いてみると、住友家先祖代々がでてくる、三菱の岩崎家先祖代々がでてくる、久原財閥の久原房之助家もあつたし、その他、三宅にとつては新聞や雑誌などでしかお目にかからないような名がズラリと並ぶのだ。とにかくケタが違うのである。いずれもみんな一度は頼まれて回向したことのある家々だから、むろん有名ばかりではなく無名の施主家もとり混ざつて、なるほどこれではちよつとやそつとの時間ですむわけがないと思つたという。

しかし結縁の各家一つずつを丹念に回向するという和尚はまゝあることだが、ここで筆者が言いたいのは、岩井の場合やつと回向が終わると、「念々……」という懺悔偈が読まれ、ついで、

『某それがしは徳なく才なく極重惡人にして、も

とより仏法弘通の器にあらず。如来大慈悲、哀愍加護して、利益を衆生にあらしめ給え」

という回向文が読まれることである。このあと、はじめて差定通りに「願以此功德……」という『総回向偈』が続くのだが、『懺悔偈』と「某は徳なく……」という回向文は、一般の差定にはないことである。つまりはこれも独自の岩井方式に数えていいものと思われるのだが、要するに岩井自身の、仏というか宇宙というか、それらにたいする敬虔の思いが、この二つを挿しはさまずにはおれなかったのであらう。

筆者はこの挿話を、三宅春光その人から聞いたのだが、彼はこの回向文にうたれ、それを筆記し、今も現実に使っているということだった。

三宅が岩井から継承したのはそれだけでは

ない。引導にも岩井式とでもいうべき独特の表白があつて、現在は子息に譲つて隠居したが、現役の住職時代はそれを用い、檀信徒から非常な好評を得たものだったと語った。高橋のいう「岩井の世界」の形成である。

さて三宅が、いよいよ東山学院を卒業することになったときのことだ。岩井が、「お前、どこの学校に行くつもりか」と聞いた。

「仏教専門学校に行きます」

いまの仏教大学の前身である。

「それもいいが、お前は頭がいいから、専門学校ではなく、大学にゆけ。東京の東正大学がいいだろう。学資がいるなら、私がだしてやる」

と言われたときには、さすがに三宅が感動した。

しかし彼の大学行きは結局、実現しなかった。

三宅は岩井の言葉に動かされて、さっそく牛深の師僧に手紙で希望を述べたのだが、彼の言葉をかりると、「師僧というのは私の叔父なんだが、これがね、わしを岩井さんにとられると思ったんだね。人にはやりたくないし、さりとてカネもよけいには出したいくない」ということで、結局、仏専に落ち着いたんだよ」という結末となったからである。

この大音寺住職時代の岩井智海を描いた、児島善三郎の絵が、今も福岡郊外久山町猪野の安河内家にある。これは児島がフランスに留学するとき、岩井が援助をしたその礼に、児島が帰朝して五〇号のキャンパスに描いたものだ、と、安河内家では伝えられている。

児島はいうまでもなく、日本の油絵を目ざして彼独自の装飾的画風を確立したことで知られる洋画家である。

その児島と岩井の関係を語るのは、ちょっと複雑だが、ことは児島が、福岡の薬種問屋の長男に生れながら、好きな絵の道に進もうとして、父と確執を生じたのに発する。

絵が好きだったのは少年の頃からだといわれるが、その彼も一度は、長崎医学専門学校の薬学科に進んでいるのだった。しかし中退した。いったんは家業を継ごうとしたものの、絵への思いが断ちきれないどころか、ますますのってどうにもならなかったであろう。大正三年（一九一四）、児島二十一歳のときである。

長男に薬種問屋の将来をたくしていた父が、この無断中退に激怒したことはいうまでもない。児島家は薬ばかりでなく、紙や漆も扱う問屋として、福岡では屈指の老舗（しやうぽ）を誇っていた商家である。

しかし児島は、中退したその足で上京し、

岡田三郎助^(三)の主宰する本郷洋画研究所に入つた。岡田は官展系の、大きな影響力をもつ洋画壇の重鎮で、当時は上野の美術学校教授でもあった。児島の目的はもちろん上野に入学することだったが、しかしこれは結局、望みどおりには運ばなかった。

児島の東京住まいは大正十三年のバリ留学までつづくのだが、じつはその間に病を得て、彼は一度、郷里の福岡に帰っている。美校への入学失敗という失意の影響もあったかもしれないし、それともう一つ、ほかにも実家と物議をかもし問題ができていた。のちに児島夫人となるハルという女性との結婚問題がそれである。親を素通りしたこの恋愛問題は、父との確執をますます癒^いしがたいものにしてしまった。

児島が勘当^{かんどう}をうけたというのは、おそらくこの頃のことであろう。彼にとつてはこの時

期が、心理的にもどん底だったと思われる。

こうした折に、児島が人生の指針を求めて、岩井を訪ねるのである。

仲介したのは、児島の従兄弟で、松村半次郎という人であった。

この松村氏については、少しふれておかねばならない。

松村家は児島家と同様、やはり福岡では屈指の素封家であり商家であつて、この半次郎に嫁いだ澄江夫人がまた、同じ階層にぞくする野村家の出身なのである。もちろん、この児島問題が起きたとき、澄江はまだ十歳にも満たない少女であつたが。

そしてこの澄江の母親・野村種が、奇しき縁の一信者として、病床にあつた岩井の晩年を看ることになるのである。

それは後の話として、松村の祖父は福岡市中央区東唐人町にある成道寺の総代であり、

澄江の祖父・野村久次もまた市内博多区奈良屋町の西方寺の総代をつとめ、児島家は児島家でこれも市内博多区上川端町にある榮昌寺の総代をしたこともあるという檀徒なのであった。この三カ寺はともに福岡における浄土宗の由緒ある寺々であり、ことに成道寺は岩井が得度をした、縁の深い寺でもあった。

例の『五重授戒結縁寺院及結縁年月日』というのをみると、福岡は彼が最も回数多く五重の勸戒師として説法に臨んだ地であり、成道寺も西方寺もかなり早期からしばしばリストに名をのぞかせている寺院なのである。筆者の取材にたいして、松村半次郎とその夫人・澄江はこもごも、

「私どもは何か困ったことがあると、すぐ岩井僧正にご相談したものでした。また僧正のほうも成道寺におられたころ、松村の祖父がお寺にゆくと必ず、紙や筆、墨などをみやげ

に持参したことを、*“嬉しかった”*と懐かしんで話されたりして、福岡には特別のお気持を持っておいでのようでした。

そんなわけで、精神的に何か困ったことがあると気安く相談を——内容的には、ま、人生相談みたいなことが主でしたが、それは何も私たちはばかりではなく、地元の人たちみんなが、僧正にたいしてはそうだったといえま
すね」

と語ってくれたが、児島の相談も、その一つだったのであろう。

相談をうけた岩井がどういう論法で児島の心の安定をはかりつつ、その一方で彼の父を説得し周旋していったのか、いまとなつては掴みようもないが、あれほど激怒していた父のほうがいかに折れてゆき、ついに勘当を解いたことは事実である。

それにしても岩井の説得力は、さすがと言

わざるを得ない。

勘当を解いたとたん父は、自分の考えとは異なる方向へ歩む息子のために、東京の代々木初台に住まいを新築をして与え、また息子のほうも病癒えて大正九年（一九二〇）に再上京すると、すぐさま新作の制作にかかり、その複数の作品群がいずれも二科展に初入選を上げたのであった。

その三年後、余談ながら児島はバリに留学し、フランスのほかスペインやイタリアを旅行して画境を深めたのだったが、昭和三年（一九二八）「父死す」の報を得て画業の研究半ばで帰国した。帰国して出品した滞欧中の作品二十四点すべてが二科展に展示されるとともに、彼自身も会員に推されるといふ順風満帆の前進をしめた。^{（注7）}そして、このようになれたのもひとえに岩井僧正のお蔭であると語り、長崎に滞在してのその肖像画の制作と

なったのである。

筆者もその作品を、猪野の安河内家で身近に觀賞する機会を得た。描かれてすでに六十年近い歳月が経っていたが、画中の岩井智海は紫衣をまとい、頬をうつつらと壮年の血にほてらせ、あたかも生きているかのように端座しているのだった。

（つづく）

（注1）維那はかつては僧団の庶務、風紀などを統括する職名だったが、現今では主として勤行や法要時の威儀や読経の指導役の職名に使われている。法要の成否はこの維那にかかわるところ大きく、法式に堪能な上席の僧が担当することになっている。

（注2）差定とは法要儀式などの性格に応じて、順序次第を定めたものをいう。

（注3）鑿は銅製の打楽器で仏具の一つ。俗にいうカネで、これにより音の句読を分ち、誦経・作法の節を整えたりする。

大小さまざまな種類がある。

(注4) 「我建超」は四誓偈の冒頭の一句「我

建超世願」を略したもの。語呂がいい

ので僧侶の間では「我建超」をこの経

文の代名詞とすることが多い。

(注5) 脇壇とはご本尊の脇にある祭壇のこと

で、固定したものもあれば、置き壇に

なったものもある。結縁の深い方の位

牌などは脇壇におくことが多い。

(注6) 岡田三郎助(一八六九—一九三九) 佐賀

県生まれ。明治・大正・昭和三代にお

たる洋画家。久米桂一郎や黒田清輝の

影響をうけ明治二十九年(一八九六)白

(注7) 児島善三郎は昭和五年(一九三〇)二科

会員に推薦されたが、その年の十一月、

里見勝蔵や林武などの同志とともに独

立美術協会を創立、昭和三十七年(一

九六二)に没するまで、同会の発展に

つくした。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得

て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円と

いうお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご

注文願えれば幸いです。

法然上人 鑽仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年一月二十五日

印刷

平成二年二月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

千一〇三 振替東京八一八二一八七番

教え・しきたり・行事の解説書〔日常勤行式付〕

仏事と信仰生活・浄土宗

宮林雄彦 編

● B 6 版並製
● 百四十二頁
● 定価八百円（送料二〇〇円）



本書は浄土宗檀信徒の信仰生活のための手引書である。内容は仏壇のまつり方や礼拝のしかたをはじめ、浄土宗の教え、浄土宗の年中行事などを多数のイラストや写真を用いて解説する。

【目次】第一章 仏教と浄土宗の教え
① 仏教の教え／② 仏教の流れ／③ 浄土宗の教え／④ 念仏信仰の真髄／⑤ 寺参り参り／第二章 日々の信仰生活
① 仏壇／② 仏壇への礼拝のしかた／③ その他、仏壇・仏具、お墓参りの注意／第三章 お経・念仏の実践
① 日常のおつとめ／② その他のお経／第四章 仏教行事の知識
① 年中行事／② 葬式と年忌供養／③ その他の仏教行事



群書

発行発売 群書 千170 東京都豊島区巣鴨4-7-6-403

発売続群書類完成会

千170 東京都豊島区北大塚1-14-6

東京(03)917-8411
振替口座 東京7-168759

東京(03)915-5627
書店でも注文できます。

第五十六卷

二月号

昭和十年五月二十日

（第三種郵便物認可）

毎月一回一日発行

平成二年二月一日発行